

ジェルジ・クルターグ：《サイン、ゲームとメッセージ》より

ジェルジ・クルターグの《サイン、ゲームとメッセージ》は、1989 年頃から現在に至るまで書き続けられている、独奏弦楽器（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスなど）や、室内楽アンサンブルのための小品集。各曲は非常に短く、それぞれが特定の感情・技術的挑戦・人物（バッハ、ケージなど）へのオマージュとなっており、使用される楽器の特性を追求している。

《サイン、ゲームとメッセージ》というタイトルは、クルターグの創作哲学を支える 3 つの柱を表している。まず「サイン」は、記号あるいは兆候のことで、最小限の素材で世界を表現しようとする意志が込められている。次に「ゲーム」は、クルターグ自身のピアノ曲集《遊び》と関連しており、「子供がピアノで遊ぶように」楽器に触れ、束縛から解放されることを目指している。最後に、もっとも大切な「メッセージ」は、友人、亡くなった仲間、敬愛する作家などへの「私信」に近い。「聴衆に向けて」というより、特定の人物との対話あるいは個人的・日記的な内容が意図されている。

岸野末利加：オーカース、ノックス（金と銀）II

岸野末利加の《オーカース》シリーズは、仏ラスコーの洞窟壁画から着想を得た楽曲シリーズ。タイトルの「オーカース（Ochres）」は、洞窟の「顔料（黄土色、赭色）」を意味する「Ochre（オーカー）＝黄土色」から来ている。作品コンセプトは、音色の変化やテクスチャーに焦点を当て、時間の経過による壁画の風化や堆積を音響的に表現している。

今回演奏される《オーカース I》は、フルート、オーボエ、クラリネットによる室内楽曲。3 つの楽器の音色が溶け合うことで、音が濁ったり、揺らいだりしながら、黄色から茶色、赤土色へと混ざり合っていく様が描かれる。

2 曲目の《ノックス（金と銀）II》は、江戸時代前期の俳人、松永貞徳の俳句に着想を得た、オーボエ、クラリネット、弦楽四重奏のための室内楽曲。「Nox」とはラテン語で「夜」を意味し、さらに「金と銀」は「金（＝月）」と「銀（＝雪）」のコントラストを音化したもので、色彩感のある音響が志向されている。

ジョージ・ベンジャミン：《小さな丘へ》

ジョージ・ベンジャミンが、劇作家マーティン・クリンプ（Martin Crimp）と初めてタッグを組んだ 2006 年の作品。室内オペラの形式をとっているが、「リリック・テイル（Lyric Tale）」と銘打たれている。

物語のベースは、有名な伝承「ハーメルンの笛吹き男」だが、現代社会の政治的寓意や心理的恐怖を含んだダークなドラマとして再構築されている。

登場するのは、ソプラノとコントラルト（アルト）の女性歌手 2 名。この 2 人が、代わる代わる「語り手」「群衆」「大臣」「大臣の妻」「見知らぬ男（笛吹き）」「子供」など全ての役を演じ分ける。シノプシスは、以下の通り。

【第 1 部】 ある町でネズミが大量発生し、人々の生活を脅かしている。群衆は、再選を控えた大臣の屋敷に押し寄せ、「ネズミを殺せ！」と激しく詰め寄る。大臣は自分の地位を守るため、事態の収拾に焦る。そこへ「見知らぬ男」が現れ、「ネズミを駆除できる」と申し出る。大臣は、高額報酬を約束してネズミの始末を依頼する。男が音楽を奏でると、ネズミが操られるように彼に付いていき、姿を消して町は救われる。

【第 2 部】 仕事が完了した男は報酬を求めて大臣のもとへ戻って来る。ところが大臣は「ネズミは駆除されたのではなく彼ら自身の意志で去ったのだ」「音楽は偶然だ」と、報酬の支払いを拒否する。男は立ち去るが、その夜戻ってきて音楽で町中の子どもたちをおびき出す。子供たちは町はずれの「小さな丘（Little Hill）」へと消えていく。半狂乱になった大臣の妻は「私の子どもはどこ？」と夫に問いかける。すると、丘の中から子どもたちの声が響く――「ぼくらの家は土の下。光に向かって掘り進んでいる。見えないの？」不気味な余韻のなか、残された大人たちは、呆然と立ち尽くす。